

広島で被爆して

中 村 治 弘

昭和十九年一月一日の午後、当時陸軍二等兵だった私は、満洲國東安省勃利に駐屯していた戦車第二師団隸下の戦車第七連隊第三中隊の初年兵でした。丁度お正月でしたから、折よく巡回して来た慰問映画「無法松の一生」を観ることができました。

これは昭和十八年に製作された映画で、主演は当時バンツマの通称で絶大な人気を集めていた阪東妻三郎（現田村高弘の父）が、無法松と呼ばれた人力車の車夫の松五郎役。軍人の夫人役は戦後に知った名前ですが、宝塚出身の“園井恵子”。軍人の子供の役が現在は老境に達した長門弘之という顔ぶれでした。

この映画はご覧になつた方が多いとは思いますが、なかなか面白い映画で、特に終末に近い場面、松五郎の死後、わずかの遺品の中から軍人の妻名義の数冊の貯金通帳が出てきたところでは胸を打たれました。現在でいうプラトニックラヴなのですね。

私はこの軍人の夫人役の園井恵子が大変印象に残つております、いつか戦争が終わつたらこの女優

の名前を調べてみたいものだ。と思つた程でした。

それが何という運命の巡り合わせか、その時から一年八ヶ月後の八月六日。私もその女優も広島で一緒に原子爆弾の被害者になつてしまつたのです。

被爆当時、私は広島市の東隣りの坂村鯛尾地区に駐屯していた船舶整備教育隊の第四中隊配属の見習い士官となつていました。昭和十九年の年末に東京の陸軍機甲整備学校を卒業して、十二月二十九日にこの部隊に転属になつていたのです。

広島市の海岸地帯を“宇品地区”と呼んでおりますが、ここに陸軍船舶司令部があり、私の部隊はその直属の教育隊の一つで、第一中隊が舟艇のエンジン、第二中隊が電機関係。第三中隊が木工すなわち舟大工、第四中隊が鍛冶屋と鋸物、第五中隊が操縦船操縦、それと材料廠とで編成されており、私はそこで全国の船舶部隊から派遣されてくる兵隊に、夫々の分担業務を教え込んで帰す。という業務を遂行する教官要員のはしくれだったわけです。

被爆当時の朝は、いつものように将校集会所で朝食後、中隊の見習い士官室で同僚三人と暫時くつろいでいたとき、突然窓の外がものすごく明るくなつたので、「何だろう？何だろう？」と言つて いるところへ今度は巨大な、としか形容の仕方のない爆風が襲つてきて、外からの砂煙や天井のほこりで室内は一瞬真っ暗になりました。

「やられた！爆撃だ！」

とっさに床に身を伏せたのですが、続いて来るべき一発め、三発めが来ないので、それでは、とばかり手早く軍装を整えて中隊本部棟の玄関前に出てみると、ほぼ右正面にあたる広島市中央部の上空に、表面のところどころが白いベールで覆われたようになっている巨大な火の玉が浮かんでいたのです。

後で図面で計ってみましたが、部隊と爆心地との距離は約六・五キロメートルくらいのところでした。そのため、肉眼ではなく解らないのですが、双眼鏡で覗くと、もう表面はかなり白くなっているが、火球の内部では火焰のようなものがメラメラと右へ走ったり、反対方向に揺らいだりして、時々白いベールを破つて表面にも赤い舌を覗かせてくる。といった様子が観察されます。

爆心地付近の地上ではこの時はもう、大規模な火災が発生していたようで、双眼鏡で見るとマッチ棒の炎ぐらいの火の色がチラチラと見え、そこから火球との間に上昇気流やら下降気流やらが入り交じって何かが動いている様子です。見るうちに不透明な固まりがあちこちに出来てきて、だんだん曲がりくねりながら繋がって行き、終いにはきのこの軸の形になつてゆきました。その軸も太くなり、おそらく火球も上昇しながら拡大して例の典型的な傘型きのこ雲になるのですが、広島の場合、これまでになるには爆発から三十分くらいかかりました。

この日は月の始めの月曜日で、教育隊では八時三十分から中隊長の訓話があり、午前中は防火施設の点検整備が課業とされておりました。他には特別な業務もなかつたので、時々きのこ雲を観察できたのですが、この時点での市内の被害状況は残念ながら全く掌握出来ませんでした。一因として部隊と司令部との電話回線を張り替え途中で不通だったことがあげられます。それよりあるの一発で上級司令部の統帥系統が壊滅され、通信施設もほとんど機能を失つたからだと思われます。

部隊から副官を市中偵察に派遣しましたが、これが昼食時に帰隊し、将校集会所でその報告がありました。

広島市全体が重大な損害を受けている。

市の中心部には最早入れない程に壊滅している。

専売局から先には進めない。

迂回して望見したが、広島駅にも火の手は及んだようだ。

各河川には負傷者が殺到しており、死者も多数でてている模様。

このような驚くべき内容でした。

この報告を聞き、救援のための部隊長命令がありました。

一) 各中隊から将校を長として、下士官一名、兵五名づつ乗せた舟艇を二隻づつ救援隊を編成。鋸、カナテコ、スコップ、燃料等必要機材を携行して川を溯り、川岸に避難している市民を救出して鯛尾および似の島に搬送すべし。

二) 各中隊はそれぞれの空き兵舎に大至急寝具を用意。可能な限度まで負傷者を収容せよ。
これで全将校は一斉に中隊に帰り、各中隊ではそれぞれ救援班、収容班の分担を決めて作業を開始しました。私は第四中隊の収容の責任者に指名され、同僚の滝沢、池長両見習い士官はそれぞれ救援班の艇長を命ぜられ、午後二時ころから逐次出発してゆきました。

私は中隊本部詰めの准尉や下士官を集めて協議し、負傷者の受け入れの手順。名簿の作成要領。桟橋から中隊までの負傷者の搬送班の編成。担架の製作。歩行可能者の案内人の指名。看護責任者に中隊所属の衛生上等兵を充て、その助手となる者を指名等々、目まぐるしい手配を終わったと思つたところで、桟橋に搬送班を引率して行つてみました。

二時半過ぎころから収容船が桟橋口がけて殺到し、瞬く間に桟橋の両側だけでなく、突端まで二重、三重に舟艇に取り囲まれてしましました。

内側の船から負傷者が次々に降ろされ、その人たちを搬送班が担架で、またはおぶつて、歩ける人は案内人が誘導しながらそれぞれの中隊に収容して行き、内側の船が作業を終えると外側の

船が入れ代わって接舷、負傷者を上陸させる。という作業を必死に続行し、負傷者を降ろした船は折り返し全速力で宇品に向かってゆきます。

負傷者と言えば、見る限りの人は、これまで見たこともない背中一面の大火傷で担架に腹ばいで寝かさなければならない人。顔全面の火傷で眼もふさがっている人。両腕の大火傷のところを強烈な爆風に襲われて、皮膚がべろりと剥がれ、指先の爪のところからだらりとぶらさがっている人。どこか骨折しているらしく動けない人など、もう地獄というしか表現のしようがあります。それらの人々が皆、苦痛に呻いているのです。

私は部隊桟橋から中隊へと何回か往復しながら、その合間に宇品の方向に眼をやると、その都度こちらを目ざして来る船が何隻も何隻も続いていて、帆柱が林のように連なって見えました。

これはまだまだ負傷者が絶えないことを示していく、『いつまで続くのか』との思いが浮かんだのでしたが、その内に『今まで本土決戦に備えて、夜間切り込み隊を想定し、演習で士気を高めていたのだが、何か知らないがこの得体の知れぬ一発で被害の全体像はわからないのだが、ひょっとすると、この戦はマイッタのではないか』という思いが脳裏をかすめました。

午後五時ころで各中隊とも収容能力が満杯になつたので、次々と作業を終了し、第四中隊も一

二〇名くらい収容して終了しました。

私が何回目かの収容状態見回りの時に、看護責任者の衛生上等兵がある負傷者を指さして、「あの人は新劇の団十郎と評判を呼んでいる有名な俳優の丸山定夫です」と教えてくれました。しかし、正直なところ田舎で軍国少年として育った私にとっては、その方面は全く無知だったのでも、丸山定夫の実力や業績を聞かされてもその真偽を理解することができませんでした。衛生上等兵が随分気にしているようだ。ということはわかりましたので、負傷の具合はどうかと尋ねたところ、外傷はあまり眼につかないようだが骨折なのか打撲しているのか、具合が大変悪いようです。との返事でした。その時の状況としては負傷者は収容はしたけれども、何も手当をしてはあげられず、ただ、避難途中の場所からとりあえず安全と思われる場所に移し、身体を横たえる場所と水、食事を提供するだけが精一杯だったので、衛生上等兵には「ご苦労さんだが、それとなく気を配っていてあげなさい」と指示しておくよりありませんでした。

収容を開始して一時間くらい経ったころでしたが、その頃から既に一人、三人と亡くなる人が出てくるし、痛い痛いと呻く人。水をくれ、水を。と言う人。寝ていながら歩き回ろうとする人など、それらが皆、手ひどい火傷や手傷を負っている人たちで、私たちもその地獄の中を飛び回っていましたから、衛生上等兵としても丸山定夫のことここだわってばかりはいられない状態でした

た。

私はその時、隣の坂村の中央部にある坂国民学校に行って、そこに負傷者の収容所を開設せよとの命令を受けて、下士官一名、兵隊四名で毛布、食器などを携行して午後七時頃に開設したのでした。

ここは広島駅からは鉄道線路沿いには十二キロメートルくらいの距離なのですが、午後七時頃からボツリボツリと負傷者がたどり着いて来るようになりました。線路沿いには十二キロメートルですが、負傷した身であちらこちらさ迷つてくるので、おそらくは二十キロメートルも歩いて来たのではないでしょうか。皆疲れきってよれよれの姿になつてているのです。

十人目ぐらいかに、産気づいた婦人が転がるようにして到着しました。とりあえず毛布の上に休んでもらつたのでしたが、出産については軍人の私たちでは皆目わかりませんので、近所の家を尋ね回つてお願いしたところ、「それはお困りでしょう。これは女のする仕事ですから私が引き受けましょう。どうぞお連れ下さい」と言う人が出てくれて心底安堵しました。しかし、あの状態の中で果たして無事に赤ちゃんが誕生したかどうかはわかりません。

午後九時ころになつて中隊から負傷者の食事を運んで来たときに伝令があり、坂国民学校は臨時に野戦病院に移行することになったので、中村見習い士官以下の兵員はそのままにして帰隊せ

よ。との命令があつたので、負傷者にはその旨伝え、食事の用意をして帰隊しました。その時の収容者は三十人くらいになつていたと思います。

中隊では私が帰隊したとき既に八人が死亡しており、まだまだ続出するものと思われる状態で、その人たちの遺品を収める箱や卒塔婆板の製作や死亡者名簿の作成などの仕事が加わって、ほとんど不眠不休の状態で夜を明かしました。

七日になって、同室の見習い士官二人は、前日に引き続き今度は死体処理のため、部下を連れて出発してゆき、私は中隊に残されて週番士官を命ぜられたので、中隊から離れられず、更に収容者の中に身寄りの者が居ないか?と捜しに来る人の案内や応接など、中隊と部隊本部の間を駆け回つておりました。この部隊は教育隊だったので、いつもはかなり大勢の将校が居るのですが、當外居住の将校が大半なので、自分の下宿先や自宅の被災処理のためだったのか、中隊内にはあまり見かけませんでした。

中隊には松井少尉が中隊づきになつていましたが、中隊長から許可を貰い、八月六日は出勤前に市内中心部にある陸軍の共済会的な施設である偕行舎の歯科医に寄ることになりました。それが丁度原爆炸裂時に合致しており、爆心地付近を歩行中、被爆して行方不明になり、兵隊に将校も加わって捜していました。ところが七日夜になつて広島市北方の郊外白島（はくしま）地

区の農家に助けられていることがわかり、ようやく中隊に連れ帰ったのでしたが、右後方上空から被爆しており、わずかに露出していた上衣の襟と軍帽との間の首の右後ろが黒焦げになつてゐる大火傷。その上、爆風で飛ばされてお城かお濠の石垣に叩きつけられて骨盤骨折と片足の大退部も骨折している様子でした。治療に当たろうとしても陸軍病院、赤十字病院も壊滅している状態。部隊の医務室には軍医大尉と見習い士官が居るのですが、「痛い痛い。なんとかしろ!」と叫ぶ松井少尉に、痛み止めの薬を投与するぐらいで有効な打つ手もなく、九日明け方に息を引き取りました。これは今になつて思えば、骨折も重大なダメージになつていたことは事実ですが、致命傷は爆心地直下で大量の放射線を浴びた結果ではないかと思われます。

十日の午後になつて俄かに部隊内の動きが慌ただしくなり、今日、明日にも米軍が広島の宇品地区一帯を絨毯爆撃するという情報が入つたので、部隊に収容していた負傷者を坂村の東端すなわち呉市寄りの小屋浦国民学校に臨時野戦病院を開設して、そこに移送することになりました。

十一日早朝、五時起きをして朝食も攝らず、おぶつたり手を曳いたりして、何隻もの舟艇に分乗して朝靄の中を透かし見るようにして小屋浦に向かいました。距離は舟で三十分くらいだった筈です。この日までに、部隊内では重態者で死ぬ人は死んでゆき、残った人は数日間の安息日を得て、やや小康を保てたのに小屋浦への移送のためにまたまた容体が悪化した人もおりました。

ただ、この時点で第四中隊約九十名、部隊全部で多分八百名以上の人人が、私の手から離れることになったのです。

もちろん、第四中隊に収容されていたあの慰問演劇隊「桜隊」の隊長、丸山定夫もその中の一人で、爆心地から約九百メートル付近の宿舎で、私が満州で観た映画に出ていた園井恵子、仲みどりなど、隊員九名と一緒に被爆したのでした。

一組の演劇隊が同じ宿舎で暮らしていたのですが、手狭なため、一組が先に宮島の存光寺に移っていたため、こちらは被爆を免れました。桜隊が被爆したことを知って、手分けして探し回り、ようやく丸山が鯛尾に居ることがわかり、迎えに来たのですが既に小屋浦に移っていたので、更に出直して十三日に宮島に連れ帰ったようでした。その丸山定夫も残念なことに十六日、宮島で息を引き取ったそうです。「こんな所で死んでたまるか」と何度もくり返していたと伝えられています。

園井恵子、仲みどりの両女優は被爆当日、いずれも船舶部隊の船で宇品から似の島に運ばれておりましたが、その後園井は神戸の知人宅に。仲は東京の母の許にたどり着いたそうです。園井は神戸から岩手県に居た両親に「無傷で助かった」と手紙を出しているのですが、急激に容体が悪化して八月二十一日に亡くなりましたし、仲もまた、東大病院に入院したのですが、彼女もどん

どん容体が悪くなり、二十四日に眼を閉じました。三人とも被爆による放射線の悪影響がはつきりと出ていたそうです。

広島市では被爆当日の死者数を七万人。その年の年末までの死亡者数を十四万人と推定していますが、この数字は私のみならず、誰にとっても大変な衝撃です。中でも、丸山定夫、園井恵子、仲みどりの死は、少しばかりですがふれあいのあつた人たちだけに、一入印象深いものになります。そして私にとって、もう一つの死がもっとも強烈な印象で心に焼きついております。

それは第四中隊の収容者の看護責任者であり、私に丸山定夫の人物評を語ってくれたあの衛生上等兵の死でした。

彼は終戦の詔勅が発せられた八月十五日の深夜、部隊の医務室で服毒自殺を遂げてしまったのです。理由は今もってわかりませんが、中隊内務班の安田班長が私の耳にそっと囁いたのです。「彼は軍医の稚児さんにされていたとの噂だったよ」思ひがけない言葉でした。

あの衛生上等兵はやや小柄で丸顔の、大変温和な人柄だったようで、丸山定夫を的確に評価していたのは、彼自身が相当の教養人だったことが推測されるのです。あの時代は詩人とか画家とか演劇人など、今で言えば文化の担い手なのですがそれが評価されず、苦難の時代だったのです。その時につけて、新劇界の大御所である丸山定夫について、それを正当に評価していたのです。

そういう人なので、時代が自分の性格と反対方向に進んで行くし、心なうすも兵役に駆り出され、上官の命令にはいくら不本意であっても背くことはできなかつた。そして目の前の広島市は一発の得体の知れぬ爆弾で壊滅してしまい、尊敬していた丸山定夫も犠牲になつた。瀕死の状態で横たわっているのに何もしてあげられない。そして今日は戦争の負けを知らされた。自分は何をしてきたのだろう。将来に対する展望もない。と、絶望と悔恨に苛まれて死を選んだものと推測するしかありません。遺書もなかつたそうです。

陸軍の礼式令では、軍人の死亡にあたつては将校を長とする屍（しかばね）衛兵を立て、慰靈式を行つて荼毘に付することになつていて、坂村の火葬場で遺体を焼くことになりました。十六日午後、佐藤軍曹他兵隊三名で柩を積んで鯛尾岬西側を迂回して、山の中腹にある火葬場に着いたのですが、火葬場といつても特別の施設があるわけではなく、山の斜面を削つて約五十平方メートルくらいの平坦地を作り、中央部に二ヶ所、細長いくぼみを掘つてあるだけなのです。

荼毘の準備をしていると、隣のくぼみには先客が居て、老年のご夫婦が息子の遺体を泣きながら焼いていました。

聞けば、一人息子で広島文理大の三年生。家屋の取壊しに動員され、中心部に近いあたりで被爆し、六日の夜遅く、ぼろ雑巾のように真っ黒になつて帰ってきたのだそうです。医者に診ても

らっても手当の方法はなく、本人は「痛い痛い、助けて助けて」と言うのに親は何もしてやれなかつた。情けなくて身もよじれるほどだつた。と言つてはざめざめと泣くのです。本来は軍人は彼らを守つてやらなければならぬのに、それも出来ず、六日からあの悲惨な地獄を味わわせるようになつてしまつた。私は強い後ろめたさに苛まれて慰めの言葉も見つかりません。

ただ、私たちは役目柄、夜を徹して火葬を見守らなければならぬので、両親に「ご遺体は私たちがお守りし、きちんと見届けますから、お宅でお休みになつて明日朝おいでください。その方が息子さんも喜ばれると思います」と言うだけでした。

その夜は兵隊たちは中隊に帰して、私と佐藤軍曹で露天の草むらに天幕を広げ、その上に横になつて火葬を見守りました。たまたま佐藤軍曹は岩手県出身で、私は県境をまたいだ青森県人ですが、母や祖母が岩手県福岡町出身、私自身も兄弟四人も皆福岡中学校を卒業していることもあります。話が合い、身の上話などをしながら夜を明かしました。

十七日朝、兵隊が食事を運んで来てくれたので、隣のご両親には昨夜の報告とともにご遺骨をお渡しし、上等兵の遺骨を骨箱に収め、私が骨箱を首から下げて中隊に帰省しました。遺骨は内務班で供養式を行つた後、安田軍曹か誰かが実家にお届けしたようです。

私はこの時、この教育隊に配属になっている私たち第十一期幹部候補生上がりの見習い士官が

少尉に任官しているので、その旨申告する申告者としての用事が待っていて、急ぎ将校服に着替えて本部前に駆けつけ、申告を済ました。

申告の内容は、八月一日付けで陸軍少尉に任じられたこと。同日付けで予備隊に編入され、即日招集されて船舶整備教育隊に入隊を命ぜられたこと。これまで配属されていた各中隊付きを命ぜられたことなどでした。同室の池永見習い士官は死体処理に出ており、現場に泊まり込んでいたため、この日の申告には間に合いませんでした。

八月二十日頃から急に身体のだるさが激しくなり、下痢、発熱、食欲不振、嘔吐感などがありましたが、しまいには吐くものがなく、起きていられなくなり、中隊兵舎裏の断崖に掘り込んだ横穴式防空壕に筵を敷き、横たわりました。始めは一日七～八回も便所通いをしてはその都度、水をガブ飲みしていたのですが、後になるに従い、食べないものですから粘液だけの排出で、それもだんだん回数が減って、熱だけはおそらく四十度くらいもあつたろうと思います。

軍医に診てもらっても原因がわからず、ただ下痢止めの薬をもらつて服用していたのですが、全然効果が現れませんでした。

この時の状態は、小屋浦に移送する前の負傷者の人たちの表情と全く同じだったろうと思われます。自分からは見えないので、体力の悪化は自分自身ひしひしと感じていて、「何が原因

でこうなったのかわからないが、俺もここで死ぬことになりそうだ。誰か見つけてくれないか？」
という思いが胸中を去来しました。

こんな状態が一週間ぐらい続いたと思います。月末近くになって、だるさもだんだんなくなり、熱もかなり下がった感じで日まいもしなくなつたので、防空壕から出てきて当番兵の宮脇一等兵に頼んで、将校集会所から食事を運んでもらい、少しずつ食べられるようになつてきました。今になつて思えば、原爆症の軽いものだったのでないかと思います。髪も抜けなかつたと思いますし、発疹もありませんでしたから。

滝沢少尉は十七日の申告の時は一緒でしたが、その後また死体処理にあたつておりました。そして体調に異常を感じ、二十五日ころに帰隊し、軍医に診てもらつたところ、発熱と下痢のため赤痢と診断され、江波（えば）の隔離病棟に入れられてしまいました。

部隊は九月六日に解散することになり、在籍者は復員することになりましたが、滝沢少尉は入院中だったので、お別れに池永少尉と共に見舞いにいったところ、体調もかなり回復したので退院の許可が下り、五日に帰隊することになりました。なにしろ滝沢氏とは十八年十一月一日に弘前市の騎兵隊に初年兵で入営以来、満州国黒河省神武屯の搜索隊、東安省勃利の戦車第七連隊、そしてここの中幹候、甲幹試験の合格、東京の陸軍機甲整備学校、船舶整備教育隊、その第四中隊

への配属、とすべて一緒に行動してきた掛け替えのない戦友なのです。

九月六日夕方、広島駅発。大阪駅前で野宿。翌日貨物列車で富山までゆき、富山駅前で部隊からもらってきた米を炊いてもらったり、乗り継ぎ乗り継ぎで四日がかりでようやく青森県に帰りました。

私は十八年九月に室蘭高等工業学校を卒業し、十月一日に株式会社日立製作所に入社。日立工場の原動機部タービン設計課に配属の後、十一月に弘前市北部第十九部隊に入営して、一年十一ヶ月軍隊生活を送ったので、帰還してから日立製作所に連絡をとったところ、日立工場は爆撃や艦砲射撃で甚大な被害を受け、再起もままならぬ状態の由。他の工場も戦勝国に設備や工作機械など、賠償に持つて行かれて再興の日途もたたず雇用の継続はできぬ。ということで六ヶ月の待命期間後はクビになってしましました。

さし当たって働き口もないでの、実家の居候を決め込むしかありません。

二十三年五月に町立中学校が発足して一年経つが、先生が足りなくて困っているから手伝ってくれないか。と中学校の校長である旧恩師から誘われ、第二期生の数学と理科の教員を一年足らずやらせていただきました。給料は月一千円。食いぶちとして母に一千円ずつ渡しておりましたが、いつまでも遊んでいるわけには参りません。

そのころ弟が東京の大学に復学していく、時々帰ってきては実家で工面して蓄えたなけなしの食糧を持って行くので、今までその真似をするわけにもゆきません。

当時、傾斜生産と言つて、鉄鋼産業と石炭産業には食糧の配給面で優遇されていたので、つてを頼つて北海道のある炭鉱会社に就職しました。この会社に二十年間勤めているうちに結婚もし、子供も出来、両親も引き取つて、数年間は三世代同居の時も過ごすことが出来、最後は会社のお世話をいただいて両親を逐次送ることもできました。石炭産業が石油に圧されてエネルギー市場から撤退を迫られ出したころには、同じグループを形成している電線メーカーに移籍になり、子会社を含めて約十六年間勤めることができました。

この間幸いにも原爆症類似の症状が出ることもなく、従つて被爆した身でありながら職場で肩身の狭い思いをして過ごさなければならないという、辛さに耐える必要もありませんでした。そのため、そのような辛い経験をされた先輩の方々の話を耳にする度、ああ、自分は余程運がよかつたのだな。ひょっとしたら危なかつたかもしれないのに……。と胸をなで下ろしています。長い会社勤めを終えた後、昭和六十一年から居住地の町内会のお手伝いをさせていただくことになり、これも二十年たずさわって最後は地域の連合町内会の会長を六年間拝命。平成十七年四月の総会で退任させていただき、町内会での奉仕活動にピリオドを打ちました。

こうして身軽になつた今、もし、生き残つていればもっと活躍してくれただろうファイリピンで戦死した二人の戦友や、抑留中病死した一人の戦友たちの心残りを幾分でも軽くしてあげることができたのだろうか。どうなのだろう？と自問自答をくり返しています。

広島のあの一発で亡くなられた何万という人たちに対しては、今、私は北海道被爆者協会の手伝いをさせていただいていますが、これはもう、核兵器廃絶に微力を尽くすことしかお応えできませんので、ノーモア・ヒバクシャ会館に見学にこられた方々に、広島で目撃した有様をことこまかにお知らせし、心を込めて語りかけることに努めております。